

沼澤水、新撰組、大阪森中志水、大楠公一長、谷川旭鶴、桶狭間、東京佐藤采水、竜の口、奥村慧水。

日本琵琶振興会 十月二十八日一時八分、月例親睦研究会、時東京新宿州鳳会館(會長鈴木流泉氏)。西郷隆盛、青木晴城、衣川井坂旭良、桔梗の旗揚げ、井上雅翔、勸進帳、小沢錦弥、曲垣平九郎、木原綾、湯陽江、新納岳窓、小敦盛、八束一峰、同、若林杏雨。外に名手のテープ録音鑑賞等。

錦心流琵琶と 十月二十八日屋西宮市立詩吟詩舞の会、夙川公民館松下ホール、主催蓮水会。城山の月、溝脇、吉野山懐古、村上・木の宮、篠田、菅公、川上、小楠公の母、吉田、重衡、田村、湖水、千藤、楊、新曲石童丸、山崎、本能寺、竹内優水、会津白虎隊、吉山、河内、反町、紫水、録音楊貴妃、故水藤錦、修善寺物語、桂、東京水藤五郎、琵琶舞屋島懐古、三浦蓮水(舞二人)、敦盛、神戸久内舟水、巖流島、横浜中谷裏水、戦艦大和、会主三浦蓮水。外に詩吟詩舞二十九題。

錦心流琵琶 十一月四日屋大阪府立婦秋季演奏大会、人会館、主催一水会大阪支部。金剛石、會員合吟、吉野山懐古、菊地庸子、会津白虎隊、金寄靖水、荒城の月、小西水、井伊大老、養老駿水、城山、宮の原聖水、常陸丸、松岡玲水、淀君、小塩梁水、白虎隊、飯塚、榎水、川中島、佐々木寒水、西郷隆盛、植田豊水、湖水、乗切、古田東水、本能寺、中西鏡水、新撰組、田中敷水、別れの盃、中山鳳水、石童丸、米沢柳水、湖水、乗切、藤原英水、坂崎出羽守、京都木下皇水、菊水。

の旗、神戸三浦蓮水、小栗栖、東京桑原敬水、舟弁慶、小川吟水、東憲水。

錦心流琵琶 十一月四日屋鯖江市民会館演奏会(市文化祭参加)。花の白虎隊、吉野、武士の意地、内田、柴田勝家、岸本洲峯、棄児、金沢屋山溪水、井伊大老、山脇圭水、本能寺、西川磯水、白虎隊、金沢村田知水、堅田落、同坂井旭蘭、扇の的、内田景水(立方付)、湖水、乗切、名古屋阿部勝水、竜の口、金沢田中篤水、俊寛、富山田中歴水、光華門一番乗り、会主吉野洲水。

安土浄蔵院で 戦国物語にゆかり深く重諸芸奉納大会、文級の建築、文化財を多く残す近江湖東の安土浄蔵院法要会に関西琵琶同好会が協賛し左記奉納、参拝者を喜ばせた。梅田雲浜、作花旭友、城山、多和綾子、常陸丸、矢野旭信、月下の陣、外村正幸、石童丸、野間政峯、舟弁慶、宮の原聖水、禪師と正宗、水谷旭甫、勸進帳、養老駿水、伊豆の御難、中山鳳水、地震加藤、大西進明、鴨川の露、辻旭城、北の庄、石橋旭穂、那智の荒尾、吉米、曲垣平九郎、中島旭穂、那智の荒行、美登里進水、井伊大老、天津八千代、伽羅の兜、若宮旭登。外に詩吟、詠歌舞踊、日舞、尺八等。

第三一回 会館 十一月十日静岡県婦人赤心流秋の大会 (次号詳報) (予)告 三ツ和会第一回演奏会 十二月二日(日) 午前十一時、京都東山安井金比羅宮会館

○京都琵琶協会十二月定例茶話会 十二月二十二日(土)午後二時京都市錦高倉西入料亭「富田楼」夕刻から忘年会

○琵琶を愛しむ会 十二月九日(日)午後一時大阪府立労働会館

○日本琵琶振興会十二月懇親例会 十二月二十三日(日)午後一時東京新宿州鳳会館

アッと云うまに今年もあと一ヶ月で終る。一年三百六十五日の過ぎるのが何と早いことか。また一ツ齡を重ねるのかと思うといやになる。今年には公私共悲喜交々の年であった。名人水藤錦、女史のあつけない急逝をはじめ温厚篤実の北堀省水氏、関西錦心流の雄蔵本司水氏、その他琵琶歴何十年の各流派功勞者達を失ったのは真に痛惜に堪えぬ。老少不常は世のなりとは云いながら男女共に平均年齢が延びているというのに情ない次第である。一方故錦、女史に賜った破格の勲五等瑞宝章や樋口冠水氏が函館市文化賞を受賞された事などは我が琵琶界の為に誇るべき快事であった。やがて終らんとする一九七三年を送るに際して思い出の一端を披瀝し併せて希望に溢れる新年が京絃愛読者の皆さんに幸福をもたらさんことを切に祈ってやまない。

琵琶 機関紙 京 絃

第二三四号 京 絃 社

楽理を学びながら 合理的に技を磨きましよう (二)

さて、音楽としてこの沢山の音を使用するには、これを統制する必要がこつてまいります。それで一ツの振動数を採り上げると、その振動数の倍数の振動数即ち一音域(一オクターブ)を、だいたい平均に十二に分けて夫々名付けたのが十二律であります。西洋では簡単に附号で定めませんが、中国ではむづかしい文字をつかい、日本では中国本来の律名の外に、更に日本名が付けられています。

中国、日本と西洋の十二律を左記に併記しますが、中、日と西洋の振動数は類似はしてありますが、同一でないことを附記し、御注意を願いたいと思えます。

Table with columns for musical terms (e.g., 平調, 勝絶, 下無), their corresponding notes (e.g., E, F, F#), and scientific pitch notation (e.g., Ut, Si, La, Sol, Fa, Mi).

④黄鐘||中国律の第一名と同字、オウシキと読み、鐘の代りに渉を用いることあり
⑤上無||鳳音とも云う
(2) 俗 称
琵琶、大阪義太夫では一越を一本とし、他の邦楽では黄鐘を一本とする
(3) 中国名の読み方
勿論日本での読み方でありまして、中国語ではありません
(4) 関係著名楽器の使用出来る楽音の振動数(ヘルツ)
ビ ア ノ(約) 二七一三四八〇
グアイオリンの(約) 一九四一二〇六九
尺八(尺八寸管)の(約) 一五五〇
三 味 線の(約) 一〇九一一三〇八
薩 摩 琵琶の(約) 一〇〇一 八〇〇 (禁 転 載)

明年一月一日発行の本紙は例年の通り正月特別号とし紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて新年交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます
新年特別号 発行について
遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え十二月十日迄に御申込み願います。

我が道を行く六十五年(一〇)

西郷 天風

此の足利に教授所を開設して程なく、夢沼という知人に本格的な錦心流で「鉢の木」の曲を聞かされ驚いたことがある。

この人とは、その二年ばかり前、彼が日清製粉会社の社員だった頃知り合った仲だが、その後程なく、足利町屈指の機業家永井仙太郎(通称永仙)方に入籍し、若旦那となつて仲々活躍目醒ましい手腕家とは聞いたが、琵琶に堪能であることなど夢にも知らなかった。それが突然この教場に顔を見せ、琵琶を抱いて如何にも楽しげに話いだした。

「雪は鷲毛に似て飛んで散乱し、人は鶴しように着て立って徘徊す、一刻千金の雪景色……」とこのくたり真に迫って現実を見るが如く、思わず恍惚としたことであつた。

亦或日、秋の夕だった、退屈しのぎに琵琶を弾いて一人楽しんでおる処へ、商人風の紳士が訪ねて来た。

堤防の上で暫く立聞していたが、田舎には珍らしい撓捌きなので、つい逢うて見たくなつた。といはゞ私より先輩格の御人だった。名は山田佐吉、日本橋堀江町に住む染料問屋の御曹子で、商売上の足利へは度々出向いて来るとのこと、しかも水彩画をよくすることから、無二の親友となり、大震災の頃まで

交遊は絶えなかつたが、あの時北海道に滞在中の私は氣に懸けながら氏の消息を知る術なく、氣を知って直ちに帰京とあせつたものゝ、当局の方針として混乱のさ中に入京は許されず、駅では切符を売って呉れず、道庁へも度々足を運んだが総て水の泡だった。

この山田氏には大変世話になつた私として消息を知らぬでは過ぎぬ立場にあるが、そのいきさつについては后日の稿に譲るとする。扱て琵琶の稽古日は足利も館林も週に二日であり、残りの三日は当然の勉強と云うことになり、残りの三日は当然の勉強と云うことになれば面友もなく従つて刺戟もない。自信のない筆を執つて無駄骨を折るより琵琶の道に専念する方が得策ならんと、思いついたのが琵琶楽器の製作だった。折も折、製粉会社出入の指物師が、店の前に桜の大木をほおり出して置くのを見付けたからであつたが、その大木を分けて貰い、厚さ四寸余、丈三三寸余、巾一尺余の厚板三個取ることが出来

それから腹板用に四分板一枚づつを裂き取つて琵琶三分分の材料が揃つた、あとは琵琶の形を切りぬき、残りの部分から海老尻も天神も、鳥ノ口も糸巻も霞手も総て取ることが出来、半年もかゝつて作り上げた琵琶は少々音が小さいだけで結構役に立ち、弟子達が喜んで引取つて呉れた。

琵琶を作つたのは之が二度目であつた。初めは花房写真製版所の客員だった時、其処の大工を相手に製作して失敗、それは胴のほり

方に欠陥があつたからで、花房氏から、胴を掘るには甲丸のノミで波形の溝をつけ、其の反響を応用するのがコツであると教えられ肝に銘じていた。

また其頃、凡そ薩摩琵琶の大家たらんには先づ楽器の製作まで教え得る者たるを要す、とはよく耳にした先輩の言葉であり、満留先生も折にふれ其構造を説いて下さつたが、館林に居る間に試作し得た私は洵に幸であつた。爾来今日まで放浪に等しい生活のうちに年老いてしまつた私であれば尚更のことである。

因に琵琶楽器製作について、其大略を述べらば、前述の材料四寸板を琵琶の形に切りぬき、それから腹板用として四分板をそれぞれ一枚宛裂き取つて、本体は腹部の丸味やそり返り具合等、完成した琵琶の通りに一旦削りあげるが、それは表面だけで、裡面の方は手をつけずにおく方が工作上便利である。

かくて腹の部分の周囲八分位づつ残して掘るが、深さは裡側に五六分位の厚味を残す、これが音の大小に関係することや、甲丸のノミで浪形に掘り、その反響を応用すること等心得おくべきである。亦撓面の横線に併行するあたりをそり橋をかけて、腹板を張る時のそり具合を助ける、又腹板用として裂き取つてある四分板は熱湯で蒸し、柔かになつた処を胴の周囲に掘り残した糊付の部分に合せ、締めつけ乾かすこと数日、之で乾いた腹板はやゝ丸味がつき、張りつけるのに便利になる。之が一番大仕事で、ニカワの溶き加減によつ

ては梅雨時に至り折角の骨折も無駄になりかねない。ニカワを溶くには先づ伍詰の空缶に水と共に入れてふやかして置く。次いで適当な鍋に入れて火にかけ湯煎し、よく掻き廻してから火力を弱め、体温位までさまして試みに杉箸を入れ、引揚げればたらたらと筆がうすい鉛の如く垂れる程度の濃度がよく、それを竹製の薄いヘラにつけて、胴と腹板の合せ目を少しづつすかし乍らその隙間に塗り込み再び強く締めつけ乾燥し、最後に裡面を削り琵琶の形が完成する。これ程吾々琵琶人にとって楽しい工作はないであらう。



狂酔亭漫録 (第九十五)

義俠 俵屋玄蕃

古谷 寛水

所謂元禄忠臣蔵事件に関しては過去数年に渉り、事件の本筋及び銘々伝の一部を記述して来たが、外伝と称するものは先年刀匠津田越前守を紹介したのみで、殊に仇討当夜に直接関係あるものには未だ触れていないので今回は、正史に見えぬが紀州徳川家の浪人で宝蔵院流管槍の名手、俵屋玄蕃が討入の当夜山鹿流陣大鼓の音に目を醒し、さては赤穂浪士の乱入と吉良邸門前に駆付け、大石始め義士達と対面の上、義俠心を持ってその附近を警固するといふ、演劇や映画其他で古来有名な

物語を、俗説として御紹介する。

赤穂義士の一人前原伊助宗房は、松の廊下事変により一藩離散、仇討政行決定後、夜泣そは屋の荷を担ぎ仇敵吉良上野邸の附近を毎夜彷徨して様子を窺う。

或晩本所相生町に於て一軒の道場らしい家からそば十数杯の注文を受け、之を届けた際様子を覗くと、先生と称する一人物を中心に十余人のヤクザ風の男が博奕を終り、是から一杯という処らしい。

其後も度々同様の注文を受けるが或夜の事主人がまだ食事後間がないので腹空しをするから見て居れという。前原は部屋の間で様子を見ると、主人は道場の長押から九尺柄の手槍を外し石突きつけば輔走る。道場正面に積んだ二個の土俵、上は十六貫下は十八貫、主人は之を突いて力試しをするという。

浅野家に於て槍を執れば千葉三郎兵衛、杉野十平次と共に三羽鳥と云われた前原は一心に眼を凝らす。掛声諸共主人が槍をしごとと穂先が七八本に見える、エイツとばかり十六貫の土俵に突き差し気合を掛けて撓ね上げる息も継かず十八貫の土俵を撓ね上げ、二つの土俵を順々に目の廻る様な早業、十余回を繰り返すも乱さず席に戻る。前原は驚歎するばかり。茲で主人は、自分は紀州家の浪人で宝蔵院流の管槍を遣り俵屋玄蕃と身分を明かす。

前原は予てから高名な俵屋の事は聞いて居たので之はよき機会、吉良邸討入まで一年掛かるか其以上か、兎に角更に腕を上げて置け

ば役に立つと思案し翌日、江州彦根の浪士大瀬伊助と偽名し、衣服を改め俵屋に入門を願ひ出る。前原は余暇ある日には道場に通り、熱心に稽古を積み腕前も上達する。

或日前原が無沙汰をしたので俵屋道場へ行くと誰も居ない。道場へ上ると俵屋が破目板に凭れ両足を投げ出し如何にも憔悴した様子理由を聞くと今日で七日間も飯を食わぬとの事、驚いて近所へ走り大急ぎで酒食を調べて俵屋に供し詳細を問うと、之も赤穂浪士の為というので、よくよく聞いて見ると、

過日清水一角と云う者が罷越して、身共を上杉家へ三百五十石で召抱えようとしたので内実を調べて見ると、程遠からぬ松坂町吉良の屋敷の附け人と聞く。大石内蔵助良雄を始め一味徒党の者何十人あるか知らねど、お主の仇討近きにあらん。憚り乍ら俵屋九尺の手槍一本執り、サア来い来たれと構えたら四十五十の浅野の浪士、玄關から奥へ一人も通ず事じゃないが、それでは済まぬ忠義の二字、嫌ぢやと言つて断つたので、その為斯く七日の間も食わぬ様な始末、浅野浪士の知る事ならず、之も世に謂う縁の下の力持、併し乃公は是れだけの陰徳を施したと思えば武士の了簡は済む、と云う。前原聞いて涙を流し、俵屋先生こそ真の武士と心に思い乍らも氣を取り直し、私事奥州仙台に用事あり、一ヶ月許り不在致します。其間の御小遣金五両茲に持参、又御酒を始め米薪醬油等も御不自由なきよう用意しました。何れ帰宅の節は又お目

通りを、と別れを告げ、早速石町鐘撞堂新道なる大石の浪宅を訪ね此件を報告する。

大石も聞いて感激し、同志三村次郎左衛門に、本郷五丁目前田家の家臣村上主膳と偽らせ、俵星方へ使者として乗込ませ、俵禄五百石を以て前田家に召抱えの儀を申し入れる。事情を推察した俵星は快く引受ける。三村は言葉を引き、本年は年廻り悪き為一陽来復の春の事と致し、夫れ迄の御支度金として金子を贈る。(一書には千両とあり、現今の二十萬円以上になり一寸過大の様である。)

三村の帰った後俵星は、嗚呼大石は智者ちやと感嘆する。何処で知ったか、一旦去ったヤクザの門人達がドヤドヤ戻って来る。俵星は従来俵の相手をした事を後悔し、一人に三両宛の金子を与え一同に紋付袴を用意させ博奕を禁じ槍の稽古に専念させる。ヤクザ達も始めは不平であったが、追々励みがつき一心不乱に稽古を積む様になり、日を送るうち其年の極月十四日を迎える。其日は朝からの大雪で寒く、弟子達が葱餅(ねぎま)鍋に熱燗を用意し先生に進めて居る折から玄關に声あり、一人が出ると前原が紋服姿で立っている。夜泣そば屋の礼装に驚いて先生に通じる。俵星は立上って出迎えると前原は、此の度故主へ帰参が叶い、明日出発致します。永々の御恩儀は終生忘却致しませぬ。御礼券々お別れを申し上げ度く、急ぎます為之にて失礼致しますと匆々に辞去した。後姿を見送って俵星は、是りや乱入は近きにあるぞ、と推察す

る。俵星は酒を呑んで寝に就く。

夜は深々と更け渡る、子の刻半と云う頃にドーンドーン寝耳に響いた太鼓の音、たしなむ武士は寒夜に霜降る音に目を醒す、玄蕃ハッと飛起き、窓から表の様子覗いたり、「オ、近くに打って遠くに響き、遠く打って之を近くに聞くが如し、言わずと知れた山鹿流陣太鼓、而も一二三流れ、今宵の雪を幸いに、月こそ変れ日は同じ、吉良の邸へ夜込み乱入、俵星玄蕃心ばかりの助勢致さん」と、大小取って落し差し、覆面以て顔を包み、槍引外し鞘払い行燈の影に槍の裏表を調べ、ニッコリ笑うて表へ出る、実に白妙の銀世界、雪を蹴立ってまっしぐら、吉良邸の表まで来り内蔵助に初対面、義に依って玄蕃の助勢をするという物語である。



史蹟紀行 近畿の織田、豊臣、徳川の足跡を訪ねて

辻 旭城

近畿地方に数多く残る戦国時代の史跡、その中には訪れる人も稀な、世に忘れられたようなところもある。古い地図を手に史跡を散策して廻ってみよう。

永禄十一年(一五六八)織田信長は勅命を受け、足利義昭を奉じて京都に入り、三好、松永の徒を追って近畿に進出、ついで堺等に

矢銭と称する軍資金を課し、且つ石山本願寺に迫って来た。堺は平野郷と連絡をとり敵重なる防備をして、信長の要求を断然拒絶したがこの時石山本願寺は頼如の時代で、要害の地を頼んで信長に反抗する態勢をとった。

信長が天下統一の大業をなすには、西國の要地で天嶮に恵まれている大阪の地を手に入ねばならなかった。然るに元龜四年(一五七三)本願寺と結んで阿波の三好党は、摂津國野田福島に壘を築いて信長に対抗し、いよいよ戦は開始された。

石山本願寺の籠城戦は天正八年(一五八〇)まで十年続いたが、この間本願寺は大阪附近五ヶ所の要害に出城を築き、東は武田上杉の両氏、西は毛利氏と結び、木津伝法の出城によって海上からの糧道を確保し、毛利氏からの兵糧船を導き入れて信長を苦しめた。信長が天下統一の大事業半ばにして終ったのも、この戦に長年月を費したからである。

天正十年(一五八二)六月二日、明智光秀の反逆で本能寺は怨念の火に包まれて信長は自刃した。四条西洞院あたりに今なお本能寺井戸(信長首洗いの井戸)が柳の水の寺蹟と共に残り、更に元本能寺の町名がありし日を物語り、戦国史に果敢なき英雄の末路を偲ばせる。

山崎の合戦に明智光秀を破った豊臣秀吉は信長の遺志を継いで翌天正十一年四月、池田信輝に代ってこの地を収め、三十余國の大名に命じて築城工事に当らしめ数年を費して完

成、大阪城の武威を領民に誇示した。

城は本丸、二の丸、三の丸に分かれて華麗壮大を極め、本丸の中央には八層の天守閣がそびえ、本丸には北に北里門、南に桜門があり、本丸をめぐって二の丸があり、西に西の丸、玉造に大手口、京橋口、青屋口の諸門があった。又三の丸は更に之をめぐった広大な地域で、東は猫間川、北は淀川、西は東横堀川、南は空堀に及び十二門が設けられた。

秀吉の没後、政治の実権は徳川家康の手に移った。慶長八年(一六〇三)家康は征夷大将軍となって江戸城に幕府を開いたが、余命いくばくもない家康にとって焦眉の問題は、大阪城にあって秀吉の旧恩を思い、嗣子秀頼を擁立せんとする者への処置であった。

そのため家康は、大阪城の豊富な財力を殺ごとく企て、淀君に対し頻りに社寺の造営を勧めた。大阪附近の社寺でこの時に造営されたものが甚だ多い。その中で慶長十九年三月京都東山方広寺大仏殿の再興に当って、下野國佐野郷天明里の鑄工に大鐘を鑄造させ、南禅寺の清韓に銘を作らせて、同年八月落慶供養を行わんとした時、家康は鐘銘中の「国家安康」の一句に文句をつけ法要を中止させた。之が原因で大阪方をして兵を挙げさせるに至った。即ち大阪冬の陣である。家康自ら出陣して大阪城を囲んだが容易に落ちず、一応和睦して外郭及び諸濠を埋めたことにより翌元和元年三月、大阪夏の陣の戦が始まったが金城鉄壁の名城も姿力を削られた大阪方は、

城を出て徳川軍を迎え撃ち転戦、偶々城中に内通者があつて落城し、秀頼は淀君と共に山里丸で自刃した。豊臣家は秀吉が大阪築城後二十二年で遂に滅亡した。

夏の陣の結果大阪の地は徳川の支配下となった。大阪は軍事、経済共に全国枢要の地で幕府はこゝを重視し家康の孫松平忠明を大阪城に封じて十萬石の大名としたが、元和五年(一六一九)忠明を大和郡山に移し、伏見城番内藤信正を城代に任じた。爾後明治に至るまで引續いて城代を置き、譜代大名の内から選定、城代補佐には城番二名、その下に町奉行がおかれた。城代は將軍に直屬し東西町奉行、堺町奉行を監督して訴訟裁判を決するのみでなく、關西三十余國の大名を監視せしめ

た。

「歎五等」が泣くわいな

尚大阪市天王寺区伶人町安井神社境内には「真田幸村戦死跡」の碑がある。

錦なる 宗家さんの 早乙女 千秋
名入 錦樓師
哀しやな 去ぬる 卯月の末ッ方
諸の 想ひ残してみまかり給ひ
はや 半歳の余……
うつし世の ところ変りてお住居は

日本錦古流琵琶詩吟大会

附・四方田錦隆、土屋錦翠両氏の栄誉

鳥越なる由縁も深き 寿松院
悼まじや香煙絶えて 墓は荒れ
いまは 訪ふ人もなく
これらや 歎五等が泣くわいな

藤の実の落ちて哀しや 錦かな
ふみ女逝き 錦の末を想ふかな

群馬県内に二十三支部を持つ琵琶の針谷錦古師は、病氣全快と会員間の親睦を目的に十月二十九日午後一時、同県川原湯温泉敬業館ホテルで、高崎市の本部を始め伊勢崎、前橋、玉村、藤岡、吉井等各地の会員約二百名が雨を侵して参集盛大に開催された。

舞台付大広間に定刻錦古流総伝(宗家代行)四方田錦隆さんの開会の辞、国歌斉唱、大会代表井田玉風氏(田村町支部長)の挨拶、続いて宗家針谷錦古氏が立って、今春来病氣のため大会が今日に延びたが、今後の発展と「和は力を生む」の精神に則り手を繋ぎ合って斯道に邁進されたいと激励の言葉を述べ、向井清洲、栗原錦静両来賓の祝詞の後、会員合吟「上毛三山」で演奏の幕が切れておとされ、伊勢崎支部の琵琶吟二名合吟「西郷隆盛」、川

井支部六人の琵琶「月下の陣」を始め、各支部の独吟、合吟十四番、藤岡支部十名の琵琶「桜狩」(絃四方田、針谷)「続いて十二支部の詩吟二十五題、少憩の後式典に移り日本芸能顕彰会(理事長鈴木鉦次郎氏、代針谷氏)から総伝四方田錦隆、皆伝土屋錦翠兩氏に表彰状と楯が列席者拍手の裡に贈られた。

このあと合吟独吟十二番に続いて玉村町支部井田玉風氏の琵琶「羅生門」、剣舞四番、吉井第二支部六名合吟「乃木将軍(絃針谷)」同第一支部五名合吟「本能寺(絃針谷、剣舞入)」詩吟四番のあとを受けて、迫力と魅力に富む土屋錦翠独吟「陣中作」、テイチャクコード専属の七本という高い名調子の琵琶四方田錦隆「義士討入」、最後に宗家針谷氏の琵琶「屋島の誓」。流石に一世を風靡し群馬に針谷在りとうたわれる名手の名に恥じない立派な演奏振りで満場を魅了感激せしめた。

斯くて詩吟琵琶七十三題の全演奏を終って六時閉会。引続き宴に移って各支部の余興演出、特に吉井支部二十五人の八木節花笠踊、倉賀野支部の絃の大合奏や民謡歌謡、藤岡支部の舞踊などは抜群で拍手鳴り止まず、十二分の歓を尽し名残りを惜しみつゝ九時散会した。



文化賞受賞の榮譽に輝く 樋口冠水氏

錦心流琵琶樋口冠水氏(北海道神宮琵琶講

相談役、一水会函館支部顧問、道南詩吟連盟総幹、日本芸能顕彰会理事)は十一月三日(文化の日)函館市から第二十四回文化賞を受けられた。師は琵琶道四十三年の総伝教師で、多年琵琶を以て市民の情操教育普及に努めると共に全道琵琶界発展の功労者として令名高く、翌四日の北海道新聞朝刊にも大々的に之を報道してその功績を讃えたが、師は「私個人ではなく、古典芸能の発展を願う人達みんなへの賞」と受賞の感想を謙虚に語られた。

第四十三回筑前

琵琶全国大会 九月二十九、三十の両日に於て日本旭会主催、金沢旭会司会で開催され第一日(昼)四季の金沢外十八曲、(夜)小督外十八曲、第二日(昼)衣川外十八曲(夜)四季の金沢外十九曲。金沢、神港、戸畑、大阪中央、東大阪、大津、東京、京都、大分、長崎、福岡、熊本、神戸、鹿児島、岐阜、備後、諫早、本部、姫路、相生、明石、防長、築紫、肥後各旭会の精鋭が技を競い極めて盛会裡に終始した。

錦心流琵琶 近県琵琶人の親善と四氏の演奏大会

昇伝披露を兼ねゲスト二氏を東京から迎えて十月七日(日)昼十二時秋田市児童会館で一水会秋田支部、秋田琵琶連盟主催で開催。桜狩、河内の宿、伊

藤、送別、小畑、秋は逝く、鈴木明水、秋葉、新開領水、母常盤、星野雄水、淀君、佐々木水、勿来の関、船木瀧水、舟弁慶、竹内信水、新撰組、渡辺禎水、五条橋、荒井藍、中村紅水、中里千水、白虎隊、石川仙水、別れの盃、辻有水、光秀の最期、鈴木岳亮、佐野の夜語、結城越水、川中島、熱海椿水、粟津の巴、松井灯水、伊豆の御難、萩野甲水、木村重成、宮原環水。

女流さつき会

十月十日(祭)正午十周年記念演奏会 大阪天王寺の市立婦人会館で大阪、京都、名古屋、東京からゲストを迎えて開催。夕立の雨、田中英月、白虎隊、飯塚棟水、西郷隆盛、藤原英水、常陸丸、伊勢谷安江、吉野落、岡部錦蝶、屋島の誓、中山穰水、井伊大老、小西甫水、城山、松岡玲水、恩讐の彼方、中野淀水、静、松原孔水、教盛、中山鳳水、澤陽江、小川吟水、木村重成、中西穂水、竜の口、前田綱水、小栗栖、三輪花水、湖水乗切、阿部勝水、戦艦大和、矢吹旭美津、彰義隊、杉秀夫、時は今也、平井春嶺、巴の前、仲川秀邦、茨木、山崎旭萃、本能寺、東憲水。

榎本芝水

十月十一日(木)正午東京秋季演奏会 日本橋東京証券会館。第四四五回の開催で盛会。広瀬中佐、菊地藤水、城山、小谷深水、重衡、吉田小水、本能寺、寺内降水、屋島の誓、久保田栄水、松の廊下、

高松秀水、竜の口、木村東水、石童丸、西吟水、西郷隆盛、柿木昌水、浮田秀家、一野田映水、恩讐追分節、長野奏水、常陸丸、池田信水、五条橋、小嶺妖水、白虎隊、安藤敬水、桐一葉、太白詩水、巴の前、吉田梗水、羅生門、坪井明水、棄児、加藤斐水、日蓮と阿仏坊、北沢来水、恩讐の彼方、榎本芝水。

琵琶をかこむ

本年度兵庫県文化祭に神戸支部が協賛して十月十三日(土)昼一時から一千人収容の伊丹市文化会館に於て詩吟詩舞、箏曲など六題も上演され満員の盛況であった。四条際哀詩(立方入)、空野旭詔、宮村旭当、園田旭純、絃旭堂、旭寿、湖水乗切、千藤吟泉、揚蓮清、絃蓮水、吉野山懐古(立方入)、伊藤旭揚、木庭旭山、高千穂旭楓、絃旭岡、旭桂、旭璋、会津白虎隊、久内舟水、大楠公、池田旭榮、稲垣旭見、絃旭堂、旭稲、旭晶、秋風故郷山(立方入)、富樫旭桂、宮垣旭璋、浜本旭好、絃旭昇、旭文、旭山、旭楓、五条橋、大藪旭寿、大藪旭晶、菊水の旗、三浦蓮水、若き教盛(立方入)、中村旭詔、河野旭棟、青木旭詔、絃旭岡、旭暢、旭桂、小絃旭好、大物の浦、柴田旭堂、荒城の月奏曲、神戸旭会、神港旭会の絃と歌十一人及び菊井松音社中の第二二人の大合奏。

錦心流琵琶

十月十四日(日)昼一時京都秋季演奏会 都東山区本妙寺、主催一水会京都支部。京阪、東京のゲスト五氏出演。白虎隊、牧南水、小栗栖、木下皇水、教盛、木村横水、乃木将軍、多賀帯水、羽衣、関口瀧水、横笛、早川幾水、乃木将軍殉死、古谷寛水、紅葉狩、馬場鴨水、栗津の露、梅原旭瀧、寂光院、平井春嶺、山科の別れ、小川吟

水、別れの盃、萩野甲水。外に詩吟一題

筑前琵琶、琵琶

十月十四日(日)昼一時舞臺演奏会 時千葉県安浦町中央公民館、主催旭電会。常陸丸、中村竜雪、石童丸、別れの盃、鈴木旭衣、禪師と正宗、佐藤旭榮、粟津、原、桑原旭秀、北の庄、野村旭稻、大楠公、木下旭竜、戦艦大和、一松村旭奎、森蘭丸、山崎光塚、曲垣平九郎、山崎旭萃。外に詩吟詩舞十四題。

薩摩琵琶晴風会

十月十四日(日)朝十念の首記を東京中野区公会堂で華々しく開催。来賓七氏の出演もあり盛況を呈した。菅公、山下晴楓、枯柳、望月啞江、石童丸、竹内青寿、佐藤青苑、五条橋、本橋錦風、城山、福島張水、設楽、原、青木晴城、白虎隊、大関英子、坂崎出羽守、加藤錦陽、修善寺物語、杉山雅俊、光秀、緒方晴舟、さくら、弘沢雨川、伊豆の御難、山崎典水、大野律水、隅田川、押川旭葉、景清、山下晴楓、若林晴凌、名月逢坂山、鈴木流泉、別れの盃、谷暉水、舟弁慶、浅野晴風。外に詩吟詩舞七題。

武絃会

一水会多摩支部合同研修会 十月十二日昼小金入、伊藤鑿水、紅葉狩、石井效水、元寇、清水源城、白虎隊、中村修水、井伊大老、中島澤水、肉弾三勇士、杉山桜正、吹雪の敵、高杉洲塘。

三位研修

十月十四日昼三鷹市上連雀同志会例会 公会堂。門琵琶合奏外、山崎錦幽、坂本錦道、吹雪の敵、富田晴龍、ミツドウエーの敵、山本隆水、武蔵野、大村鼓

城、台湾入、坂本錦道、利久の最期、山崎錦幽、友千鳥、生田晃堂、湯陽江(下)、栗原雨竹、小松の操(三)、鈴木鶴岡、大高源吾、村木桜柳、狂女、田戸桜丸。

秋の琵琶

十月十四日昼松山市市民会館、演奏大会 主催愛媛琵琶連盟。石童丸、森本好華、本能寺、升沢旭悠、若き教盛、原田旭悠鳥、源美朝公、斎藤旭苑、春日山懐古、松本旭翠、長柄の秋風、井手旭明、本能寺、湯藤旭窓、華の白虎隊、和田旭秀、小栗栖、遠藤旭佳、都落、高知、西森旭生、地震加藤、村上旭隆、西郷隆盛、京関旭訓、横笛、宇和島、佐々木耶水、井伊大老、白石旭優、小野訓導、石塚旭奏、伊豆の御難、粟田孫水、壺坂寺、谷口旭英、巡礼お鶴、森脇旭悠、管我兄弟、浅田芦水外、青葉の笛、佐竹旭都、白虎隊、佐藤晃絃、茨木、升久旭好、菅公、東京松田珠水、耳無し芳一、高知、白木旭芳、松の間、東京高橋理水。

第十四回琵琶

十月二十一日昼大阪府立労働会館。新撰組、田中款水、茨木、浅見汀水、淀君、小塩梁水、舟弁慶、野尻撰水、勳進帳、番匠渚水、本能寺、桃木耳水、津軽音頭、番匠渚水。尚次回は十一月二十三日同所にて開催一般参加自由。

花友会

十月二十一日昼名古屋中小企業演習会 福祉会館。月下の陣、岩間、城山、成田、武蔵野、坂井田孝水、木村重成、中西穂水、教盛、神藤歎水、石童丸、小林残水、西郷隆盛、松尾昭水、野田の笛、加藤澁水、小栗栖、三輪花水、本能寺、丹野鏡水、雪晴、れ、谷津杜水、湖水乗切、谷津花水、綱館、田中訴水、桜散る頃、水谷浩水、白虎隊、菅